

障害の考え方、半世紀の変化

— 米国を訪問して考える(2) —

津守 真

私が大学を卒業して翌年に、当時愛育研究所ではじまったばかりの児童相談を受け持ったのが、障害をもつ幼児とふれた最初である。そのときには、自分の一生涯にわたってこんなに深くこの問題とかわることになるうとは考えもしなかった。子どもの一パーセントは障害をもっているのだから、子どもの仕事の中には障害をもつ子どもが含まれるのは当然なのに。

五十年前、戦争直後には、幼稚園、保育所は午前のクラスと午後のクラスと二部制



にするほど子どもが溢れていて、障害をもつ子どもを入れてくれる園を見つけるのは困難だった。障害の人を町に放置したのでは可哀想だという考えが強く、その人たちが安心して生活できる居住型施設をつくるのが福祉の重要な課題であった。この人たちは一生施設で過ごすのだから、できるだけ早い年齢で家庭からはなして、施設の生活に慣れさせておかなければ、本人が可哀想だと親は説得された。その結果は、全く逆だったことは何十年もたった現在は明らかである。

軽度の障害の人は、早くから訓練して就職させることが特殊教育の目標だった。作業所ではこの人たちもできそうな単純作業の下請けをやらせる。その程度の能力しかないというのが一般の認識であった。本当はどんな人でもそれぞれに違った才能をもっているのだが。戦後三十年もたって、養護学校義務制が言われ始めたとき、養護学校に幼稚部を設置することが義務づけられようとした。幼児期にはどの子どもも遊ぶ生活が重要なのに、それでは幼児の幸せをうばうことになる。こうして半世紀を経た。

現代の若い親たちは、子どもが大きくなったとき居住型施設に入れることはほとんど考えていない。そう思ったら親子ともに惨めな気持ちになってしまう。

現代は、普通学校との統合教育を欲している親は多いが、日本の養護学校制度はそれを許さない。また、いまの学校の条件はどの子にもあまりにも厳しい。障害をもつ



子どもでもものびのび生きられる学校でなければ真の教育にならないだろう。

子どもは自分らしく生きられる学校を欲している。

どの子どもも大人になる。障害をもつ大人たちが生きる場が普通の社会生活になければならない。作業所、授産所は、最近かなり変化してきたが、企業優先の体質が抜けないのが私共の社会の現状である。

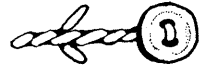
この五十年の歴史と経験を経て、私自身も障害をもつ人の理解が次第に開かれてきていることを思う。

障害をもつ人々の生活の変化——最近のアメリカ

一九九六年夏、私は若いころ学生として過ごしたミネソタ大学を訪ねた。

私が勉強していた一九五〇年代初めのミネソタ大学には、新教育全盛時代からのナースリースクールがあり、私は暇があるとそこで過ごした。障害の幼児のための幼稚園はなく、私は自分が日本で始めたばかりの家庭指導グループを誇らしく思った。

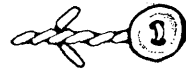
現在は、米国では障害をもつ子どもの教育は、統合教育が主流であり、親の子育てを助けるのが専門家の仕事と考えられている。専門家が一番よく知っていて障害をもつ子どもの処遇を決めるのではない（かつては、このような考えが支配的だった）。現在は、親が一番よく知っているとの考えである。



障害の大人の施設は、ミネソタ州北部フェアボルトに巨大なものがあり、四十五年前に私は一週間をそこで過ごし、重い気持ちになったことを前号に記した。現在それがどうなっているかを知ることが今回の旅行の第一の目的であった。三五〇〇人いたその施設は既にほとんど閉鎖され、最後に残った九十人も一九九八年には全部コミュニティに移される。施設から出てどうするかといえば、障害をもつ人も自分の家で自分らしい生活をする。三、四人のホームに住み、世話人も自分で選択する。昼間はジョブコーチと呼ばれる支援者が助力して会社や工場で仕事をする。それぞれが好む得意な作業をする。訓練してからではなく、その人の特色を生かすという考え方である。たとえば、紙を破るのが好きな人には、銀行で不要になった書類を破るリサイクルの仕事をする。一方には本人の好みと能力を、他方には企業に新しい職種の開発をするのかジョブコーチの役割である。

カボシア

スカルヌリス先生の紹介で、セントポール市の公共ビルの四階にある「カボシア」を訪問した。施設を出た人たちの仕事の世話をする会社である。マネージャーのJ女史は、この広い建物は、数年前までは障害をもつ人の作業所で、一〇〇人を超える人たちが仕事をしていたが、いまは、みんな工場や会社に出てゆき、二十数人の職員は



町中に散らばって仕事をしていると言われた。障害をもつ人々が、居住型施設からコミュニティに移った後、とくに重度の人たちをどうするかは大きな問題だった。私もそのことが知りたくていろいろとたずねた。

「女史」ここは非営利会社です。ひとりひとりの障害をもつ人に、仕事の斡旋とサービスをします。この会社のスタッフ、ジョブコーチ、ソーシャルワーカー、グループ、ホームの世話人、親、兄弟、本人などがここに集まり、ブレインストーミングをやって、その人の好みの能力を良く知るようになります」

私 「どんなに重度の障害をもついても仕事場にいつて働くのですか」

「女史」そうです」

私 「言葉を話さなくても、行動の問題があってもですか」

「女史」そうです」

私 「この会社はいつ始まったのですか」

「女史」一九六三年からです。もちろん、その頃はいまのようではなく、ここは作業所でした。当時は公立学校に障害児をいれてもらえなかったし、メインストリートの運動もありませんでした。デイケアの活動もありませんでした。



すべてその後のことです。それから作業所の時代にはいりません。一九九〇年にはデイケアの作業所は全部なくなりました。ほんものの仕事につくの助けるジョブコーチにかかりました」

居住型施設を閉鎖した後、一方には、三、四人を単位とするアパートの住宅を斡旋し、他方には仕事の開発をする、その積極的な取り組みがあつてこそその施設の閉鎖である。カポシアのような会社があつて、本人や親が、その人に一番適切な会社を選んでサーブスを買うのが現代のアメリカの福祉である。以前には施設や、作業所、学校などで働いていた職員の多くが、いま、障害の人をコミュニティにひき入れる仕事に意欲的にかかわっている。

変化する時代

前号に紹介した『障害をもつ人のサービスのマニュアル』の第二分冊は、「変化する時代」と題して、歴史とノーマリゼーションの理解を主テーマとする。

「私共は、過去のあやまちから学ばないならば同じ失敗を繰り返す」

「障害をもつ人々が消費者であり、私たちは彼らのために仕事をするのに、これまで彼らに発言の時を与えてこなかった。私たちはこの人々が私たちは住みたく



ない場所に住まわせながら、彼らが反逆すると驚いている」

「隔離は人をフラストレートさせ、普通には見られないおかしな行動を生み出す。一列に並び、指示を待ち、依存し、決断を他人にゆだねる。隔離は、隔離が必要なのだという信念をも作り出す。障害をもつ人は社会の脅威であり、反社会的だという考えをも作り出す。大きな施設に集めることは最初は良いと思っ
てなされたが、結果は悲劇であった」

「ノーマリゼーションは生態学的概念である。私たちの第一の仕事は障害をもつ人を変えることではない。朝起きてから、食事をし、夜寝るまで、できるだけ普通の生活環境をつくることである。環境とは物理的環境であるとともに、他の人間との相互性の環境（親しみ、愛、理解など）である」

「職業、教育、生活の準備のために訓練させねばならないという考えは、すでに隔離と依存を前提にしている」

「私たちは歴史を変化させる機会を作ってきた。そして成功した。しかし行く手はまだ遠い」

ジョブコーチ

「女史の紹介で、次の日、ジョブコーチの現場を訪問した。

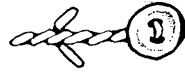
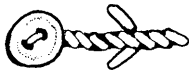


静かな工場の一室で、四十歳くらいの男性がボール紙の型紙を左から正面の机の上に移し、機械の取っ手を一度上から下に押して、それを右側の机に移すという仕事をしていた。その人は目が見えず、耳も聞こえないとジョブコーチのBさんは話してくれた。十五分くらいするとその男性は急にBさんにとびかかった。トイレにゆきたいんですとBさんは言って、連れて行った。戻ってくると、彼はBさんの肩をつかんで激しく揺すった。寝たいんだねと言って、Bさんは床にマットを敷くと、彼はそこに横になった。一日に四、五時間ここで仕事をすることだった。五年前までファリポルトの施設に入っていて、一日うすくまっつて自傷行為をしていたとのこと。今はこの近くのアパートに住む。Bさんは数年前までは施設の職員をしていたが、いま、仕事がこのように転換して生きがいを感じていると語った。

歴史を変えろという意識で希望をもって仕事をしている人たちを見るのは気持ちのよいことである。これは、今回の私の旅行の大きな収穫であった。

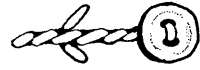
ミネソタ大学

四十五年前に、私が勉強していたミネソタ大学児童研究所は、ロックフェラー財団によるアメリカ国内七つの大学研究所のひとつで、二十世紀前半の児童研究の先端をゆくものだった。「パティールホール」という古風な建物の中にあつたが、私が去って



間もなく背後のビルに移転し、その同じ建物は、現在、「居住型施設とコミュニティ生活センター」(Center on Residential Institution and Community Living)という長い名前の研究所になっている(写真)。そのことを知らなかった私は、かけかえられた看板を見てびっくりした。この研究所は、大学の十三の学部が協力して、障害をもつ人のサービス及び職員訓練のプログラムの作成にあたっている。ミネソタ州にある社会福祉の講座をもつ二十六のカレッジのコミュニケーションセンターでもある。主任研究員レイキン教授は私がかつてこの建物で勉強していたことに感銘され、私のために半日さいて案内してくださった。その昔懐かしい建物には、長年所長をとめられたジョン・E・アンダーソン教授の部屋、昔風の彫刻の施された手摺りつきの回り階段などがそのまま残されていた。帰りがけに、すぐ後の建物の「児童発達研究所」に立ち寄ったが、夏休みでどの教授も不在で、セクレタリーに案内され、私の頃の教授の写真が壁にかけられている記念資料室でひとときを過ごした。

四十五年を経て、たくさんの知人が亡くなり、世代が代わり、アメリカの社会は大きく変化した。中でも、障害をもつ人々の生活は大きく変化しつつある。居住型施設は閉鎖され、作業所も閉鎖されつつあり、障害をもつ人が市民として社会そのものに包含されている。その実際は話に聞いていた以上であった。



その変化の原動力となったのは、「障害」よりも「人間」を先にするビープルファースト運動の考え方である。このことを考えるとき、教育も福祉も同じ地盤に立つという人間社会の原点に立ち返らされる。

下の写真

「パティールホール」旧ミネソタ大学児童研究所、現在、居住型施設とコミュニティ生活センターになっている。

